

北海道襟裳岬におけるラッコ (*Enhydra lutris*) の生息について石川 慎也<sup>1)</sup>

はじめに

ラッコ (*Enhydra lutris*) は、以前には北海道東部、千島列島からアラスカ、カリフォルニアにかけての北太平洋沿岸に帯状に分布していた。しかし、毛皮目的に乱獲されたため、現在では①北海道東部、千島列島からコマンドルスキー諸島まで、②アリューシャン列島からアラスカ、および③モンレー湾を中心としたカリフォルニアの3地域に分断されており、各々アジア (チシマ) ラッコ、アラスカラッコ、カリフォルニアラッコの三亜種に分類されているとされていた。しかし、DNA を利用した実験 (Cronin et al, 1996) により、①カリフォルニア、②アラスカ湾の内湾プリンス・ウイリアム・サウンド、③コディアック島～コマンドルスキー諸島メドニー島、④千島列島の4つの新たな亜種分類が提案されている (図1)。生息数は、1997年に行われたアメリカ・ロシアのラッコワークショップ (Gorbics et al, 2000) において、ロシア地域21,526頭、アラスカで100,339頭、カナダのブリティッシュコロンビアで2,200頭、ワシントン州で502頭、カリフォルニアで2,200頭、合計126,777頭と推定されて

いる。合計にはメキシコの9頭、日本の1頭も含まれている。その後のIUCNの報告では、アラスカやカリフォルニアでの個体数の減少が問題となっており (アラスカでは激減)、現在の総個体数は再び減少していると警告している。北海道では、太平洋東部沿岸で来遊個体が時折目撃され、特に根室市納沙布岬では1990年代半ばからその目撃情報は増加している (毎日新聞記事, 1998)。

北海道日高支庁管内に位置する襟裳岬においても、過去にはアジアラッコ (以下ラッコ) が生息していたとされているが (松浦, 1943; 宮武, 1943; 今泉, 1960)、実際にラッコがいつごろ、何頭くらいが生息していたというような具体的な記録はみつかっていない。1986年以降ゼニガタアザラシ (*Phoca vitulina stejnegeri*) の生息数調査時などで、しばしばラッコ (写真1) が目撃されてきた。また、2002年4月からは、本論を執筆中の現在 (2004年4月末) まで、2年間継続して生息しているので、これまでの襟裳岬におけるラッコ目撃記録について報告する。

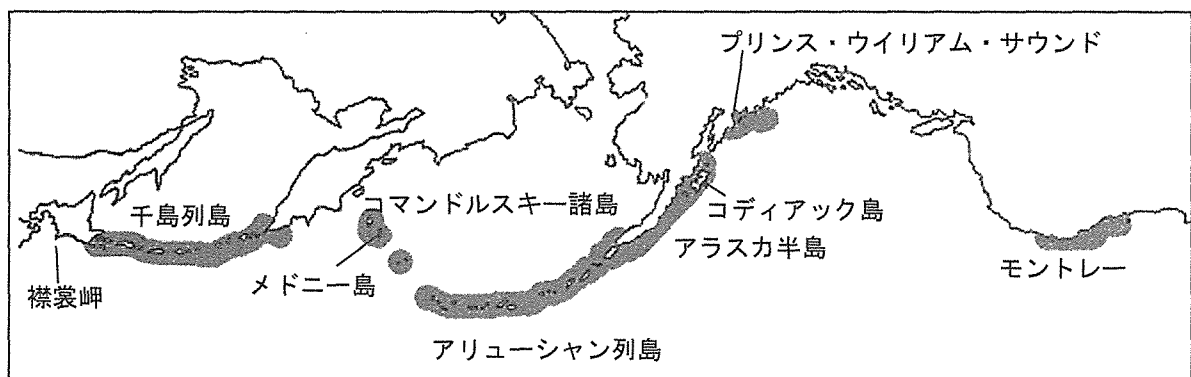


図1. ラッコの生息域図

1) えりも町交流促進センター襟裳岬「風の館」〒058-0343 北海道幌泉郡えりも町字東洋366-3

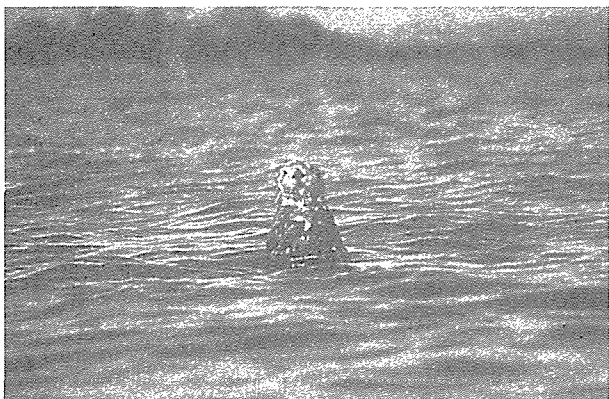


写真1. 襟裳岬のラッコ (撮影: 倉澤栄一)



写真2. 襟裳岬の岩礁帯

### 調査地点並びに調査方法

襟裳岬は、日高山脈襟裳国定公園の南端に位置し、沖合2キロにわたり大小の岩礁が続いている(写真2)。岩礁にはゼニガタアザラシが、夏の換毛期で約400頭生息している日本最大の生息地となっている。また、海藻相は、ミツイシコンブ (*Laminaria angustata* Kjellman) が低潮線から深さ10m以上まで生育して群落を形成している(千原, 1972)。オニワカメ (*Alaria fistulosa* Postels et Ruprecht) やアイヌワカメ (*Alaria praelonga* Kjellman) といった千島列島でラッコが利用している海藻類は生育していない。

調査は、襟裳岬「風の館」が開館した1998年より、アザラシ観察用の30倍の望遠鏡を用いて、一年を通して行った。調査者とラッコの距離は遠く、ラッコの詳細な生態を観察するため船による調査も数度試みた。1985年から1998年については、アザラシ生息数調査時にラッコを目撃した記録をまとめた。また、漁業者からラッコの目撃や混獲についての聞き取り調査を行った。

### 結果

#### 1) 襟裳岬におけるラッコ確認記録

これまでに襟裳岬におけるラッコの目撃記録を(表1)に示した。1986年8月にゼニガタアザラシの生息

数調査中に初めて確認され、90年まではほぼ半年ごとに目撃されていた。ただし、ほとんどが1日のみの目撃で、90年5月の5日間で最大となっている。また、88年からは著者が襟裳岬に移住し、アザラシ生息数調査日数が増加したことにより、ラッコをより目撃しやすい状況になったにもかかわらず、90年5月以降、2001年2月までの11年間には今のところ目撃したとする記録はない。ところが、2001年に、11日間、および79日間と目撃期間が長くなり、2002年4月30日から現在まで継続して襟裳岬の岩礁帯に生息している。その間の2003年2月14日から5月6日には、複数のラッコが目撃され最大3頭が同時に確認された。なお、個体識別用の標識を付けてないので確実ではないが、目視観察している限りでは、ほぼ毎日確認できるということもあり、2003年5月7日以降の個体は同一個体と思われる。

#### 2) ラッコの行動

襟裳岬では2002年から長期間ラッコが観察されているが、調査者からの距離が約1~2kmと離れているため詳しい生態調査は実施されていない。これまで観察できた襟裳岬でのラッコの行動をいくつか報告する。まず、ラッコというと海藻に体を巻きつけて休息している姿がよく知られるが、襟裳岬に生えているミツイ

シコンブは、オニワカメなどのように葉の中肋がフロート状になっていないため、ラッコが体を巻きつけ休息するには適していない。そのため、海藻を巻いて休息するというような行動はこれまでまったく観察されていない。また、アラスカやコマンドルスキー諸島では海が荒れた時には上陸して休息する (Khromovskikh, B. V., 1968 ; 新妻, 1996) が、襟裳岬では海が荒れると岩礁帯のほとんどが波をかぶるため、波の穏やかな時に稀に岩礁にアザラシに交じって上陸するのみである。採食行動としては、仰向けになり胸の上で何かを打ちつけて割っている姿が頻りに観察できるが、距離が遠いため餌の種類までは特定できない。ただ、観察している限りでは、割るための動作が激しく連続しているため、貝など殻の固い食物が主ではないかと推測される。また、2003年3月18、19、23日には、2頭が絡み合い、一頭がもう一頭の後ろから抱きつき、顔を噛むなどの交尾に特徴的な行動が観察された。しかし、距離が遠いため交尾であったかは確認できなかった。

### 3) 聞き取り調査

襟裳岬周辺では、これまで定置網や刺し網などの漁業活動によりラッコが保護や死亡したという情報は記録されていなかった。しかし、2001年11月19日に、襟裳岬の東北沖25km、水深300mに仕掛けられたタラ刺し網にラッコの死体が掛かったとの情報を得た。法

律により (後述) 死体を所持することが禁止されているため、その場で海中投棄され、個体の詳しい調査することはできなかった。

### 4) 船による調査

これまでに、船による調査を4回実施したが、警戒心が強く船上より姿を見るのも困難であり詳しい調査は行えなかった。

## 考 察

これまで北海道では、昆布漁という日本独特の漁業によりその海域に生えるコンブを毎年収穫するため、ラッコやその餌生物の生息場所が奪われるという理由から、来遊しているラッコがそのまま定着することは、難しいと考えられていた (新妻, 1996)。襟裳岬においても、ラッコが確認されている岩礁帯付近では、毎年春先にはフノリ採り漁、7~10月には船による昆布漁が行われている。しかし襟裳岬では、天候に左右される昆布漁は、出漁日数が毎年平均で30日前後と少なく、フノリ採り漁も月に1~2回程度である。また、海が荒れることも多く、容易に人が近づくことが無いため、襟裳岬にラッコが姿を現してから2年が経過する現在でも、ラッコの生息を脅かすような状況にはなっていない。よって、今まで考えられていた、昆布漁がラッコの定着できない原因であるとは必ずしも言えないと

表1. 襟裳岬におけるラッコの目撃記録

	目 撃 日	日 数
1	1986年8月6~8日	3日
2	1987年1月2日	1日
3	1988年2月8日	1日
4	1990年5月3~7日	5日
5	2001年3月23日~4月2日	11日
6	2001年12月29日~2002年3月17日	79日
7	2002年4月30日~現在 ※	約2年
	2003年2月14日~5月6日まで2頭同時確認	
	2003年3月14日~4月12日まで3頭同時確認	

※ 最大で3頭が同時確認されているが、個体識別できていないため2002年4月30日に目撃された個体と現在目撃されている個体が同一個体という確証はなく、この期間継続して目撃されているという記録である。

表2. ラッコのレッドデータブック掲載状況

機 関	カテゴリー
IUCN※(国際自然保護連合)	EN A1ace (絶滅危惧)
環境省 (日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドリスト)	DD (情報不足)
水産庁 (日本の希少な野生水生生物に関するデータブック)	絶滅危惧
北海道レッドデータブック	R (希少種)

※ International Union for Conservation of Nature and Natural Resources.の略

考えられる。

ラッコが定着した一方、ラッコの生息海域での漁業への食害が問題となってきた。ラッコの餌は、主にウニ、カニ、貝類といわれ、成獣では体重の20~30%の餌を食べる(川邊ほか, 1998)。成獣の平均体重は、約40 kgなのでラッコ一頭一日当たり約12 kgもの餌が必要となる。そのため、2003年春には、ラッコによるウニの漁業被害(写真3)が潜水調査により確認され問題となった。ラッコが生息している海域は、えりも町漁業協同組合において人工種苗のエゾバフンウニを放流し、増殖を行っている海域である。えりも町漁協えりも岬支所では毎年1~5月頃にダイバーが潜ってウニ採取を行っており、2003年に3.5~4トンの水揚げを見込んでいたものが、ほぼ全滅したといわれ、被害額を1,000~1,200万円(約3,000円/kgとして)程と見積っている。また、ホッキ貝の稚貝放流も場所の変更を余儀なくされるなど、ラッコが生息している限り、



写真3. ラッコに食害されたと思われるウニの殻

(撮影: 倉澤栄一)

今後も地域の漁業との軋轢は発生する考えられる。

現在、アジアラッコすなわち日本に來遊しているラッコは、CITES(絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約)の付属書IIに掲載され、国際商取引の規制対象となっている。国内では「<sup>らっこおっとせい</sup> 臘虎臘肉獸 獵獲取締法」という1912年(明治45年)に制定された法律により、捕獲や死体を所持することが禁止されている。また、さまざまな省庁機関で作られているレッドリストにも掲載され(表2)、保護の必要性が認識されている。しかし、実際に保護管理を行うための詳しい調査は行われていない。これは、法律のため漁業者がラッコを混獲した場合に、罪の意識から公にすることがほとんどなく、混獲の実態を把握ができないことや、研究者がラッコの死体を学術研究のために活用したり、生体の捕獲調査を実施するための手続が煩雑なためにラッコを研究の対象としにくいからである。

ロシアでは、ラッコは生息海域も含めて保護されており生息数が増加する一方で、近年ラッコの食物となるカニなどの密漁が増加し、ラッコの生息環境が悪化している。これらの要因から、今後ロシアから日本へ來遊するラッコの数はますます増加すると考えられる。襟裳岬の現状から、たった一頭のラッコでも、地域漁業に与える影響は大きく、ラッコの保護と漁業活動の両立は困難であるといえる。日本が、国としてラッコに対してどのように対応していくか、改めて考え直す時期にきているといえる。

## 謝辞

本稿をまとめるにあたり貴重な写真を提供していただいた自然写真家の倉澤栄一氏、貴重な助言や情報をいただいたえりも町の工藤美代子氏、北海道大学獣医学研究科客員研究員の服部薫氏にお礼を申し上げる。また、毎日の観察調査に参加協力いただいたえりも町交流促進センター襟裳岬「風の館」スタッフの皆さんにも感謝したい。

## 参考文献等

Carol S. Gorbics, Glenn R. VanBlaricom, Brenda E. Ballachey, Nancy J. Thomas, and Michelle M. Staedler. (2000): Sea otter Conservation: Report from the Sixth Joint U.S.- Russia Sea Otter Workshop. USFWS Technical Report MMM 00-1, Anchorage.

千原光雄 (1972): 「日高沿岸の海藻について」 国立科博専報, (5) : p151-162.

Cronin, M. A., J. Bodkin, B. Ballachey, J. Estes, and J. C. Patton. (1996): Mitochondrial-DNA variation and populations of sea otters (*Enhydra lutris*). *Journal of Mammalogy* 77, p546-557.

H.J.スノー (1910) 「千島列島黎明期」 馬場修・大久保義明訳). 講談社学術文庫.

今泉吉典 (1960): 原色日本哺乳類図鑑. 保育社.

IUCN ホームページ: <http://www.redlist.org/search/details.php?species=7750>

近藤憲久・服部薫 (1999) 「根室で捕獲された2頭のラッコ」 根室市博物館開設準備室紀要, 13: p71-75.

川邊一郎・島崎健二 (1998) 「日本の希少な野生水生生物に関するデータブック」 社団法人日本水産資源保護協会, p254-255.

Khromovskikh, B.V. (1968): Ecology and Quantity of Sea Otters on Medny Island. Pinniped of the North Pacific. VNIRO&TINRO, Moscow, p172-179.

松浦義雄 (1943) 「ラッコ、海獣」 天然社, p120-141.

宮武克己 (1943) 「オットセイ・ラッコ・アシカ」 海の科学. 第3巻第11号.

中島将行 (1990) 「ラッコの生活. 海の哺乳類」 サイエニティスト社, p218-228.

本間浩昭 (1998) 「ラッコ再来 楽園はよみがえるか ①~⑤」 毎日新聞, 5月1日~5日連載

新妻昭夫 (1996) 「ラッコは日本にいるのか」 日本動物大百科2. 平凡社, p91.

シンポジウム「21世紀の四島」 実行委員会 (2000) 「日露共同シンポジウム報告書「21世紀の択捉、国後、歯舞、色丹島」 一豊かな自然と人間との共生一」 北海道海獣談話会, p1-42.

吉川美代子 (1992) 「ラッコのいる海」 立風書房.

